

船井情報科学振興財団奨学生レポート/第四回

2020年11月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

Ph.D.2年目に進級し、フィールドコースと呼ばれる大量の専門科目の授業に追われています。ですがこのスタイルの授業はアメリカのPh.D.課程では標準的なものであるのであえて今回のレポートでは省かせて頂き、それより、経済学にもうちょっと特有の事情について書いてみようと思います。

ラボ制度があまり確立していない経済学では教員から研究テーマを貰えるというケースはそれほど多くなく、**修士1年生相当の基礎的な訓練を終えたらいきなり自分の研究テーマを自分で考えだすことが要求される**のが通常です。これは（少し誇張して）言うなればドレミだけ教えた後、おいお前明日から作曲しろ！と言うようなもので、なかなか無茶な要求です。

こうした状況を踏まえて、プリンストンでは昨年度から「学生それぞれが自分の研究のアイデアを考えて少人数の学生+教員の前で発表し、いろいろと議論してアイデア出しの練習をする」という新しい授業が2年生に課されました。このおかげで2~3週間ごとにとにかく何らかの研究アイデアを考えないといけないことになり、なかなか苦労させられました。

そこで今回のレポートでは、僕が研究の着想をどういう風に得ている（ひねり出している？）のかについて、自分が試したことのあるスタイルを紹介してみようかと思います。もちろん僕のやり方が正解であるとは限らず現在進行形で模索中ではあるのですが、もしかしたら読者（特に、学部生や修士課程の方）の何かの参考になれば幸いです。また、アイデアに関する姿勢は他分野の研究者の方、さらには非研究者の方にも通ずるところがあるかもしれないので、よろしければお付き合いいただけると幸いです。

自分の研究アイデア出しのスタイルいろいろ

自分は、大きく分けて以下の3つのスタイルを使って研究アイデアを見つけてきました：

スタイル1：何か1つ重要そうな先行研究の論文をターゲットに定め、その先行研究の議論のどこをいじると結果が大きく変わりそうかを考える。

このスタイルは、僕が東大の経済学修士課程に入りたてで、経済学研究の右も左もわからない時に特に活躍してくれたスタイルです。例として、Yamagishi (2019, Canadian Journal of Economics)¹を挙げてみます。この論文のアイデアは、東大の修士1年の春学期に取っていた授業で「租税競争の分野で研究アイデアを何か考えてみなさい」という課題が出たことがきっかけです。まず授業で紹介された論文の中で、Ogawa and Wildasin (2009, American Economic Review)の租税競争と環境問題を合わせて考えた論文が面白く評価も非常に高い論文でしたので、まずこれに注目しました。次にこの論文を何度も読みいろいろ考えた結果、「現実には、各国は環境規制の強さをいじってある程度環境ダメージを制御

¹ <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/caje.12401>

でき、企業も環境規制の水準に応じてどこに工場を作るか考える」という要素がこの論文では省略されていることに気が付きました。ですが、Ogawa and Wildasin の数学的な定式化を少しいじるだけでこの要素は議論に取り込めそうだったので、試しにその方向性で自分で色々計算してみると Ogawa and Wildasin の結果がある特殊な場合には維持されるものの、そうでない場合は崩れることがわかりました。この辺りの議論から Ogawa and Wildasin の議論において環境規制を考える重要性を強調する論文を書くことができました。

この方法は、先行研究の枠組みを基本的には踏襲できるので、まだ経済学の知識が不足気味であったり研究に慣れていなかったりして、ゼロから議論を立ち上げるのがつらい場合に特に有効だと感じました。先行研究をしっかりと踏襲しているので、「藪から棒」「独り相撲」のような議論に陥る危険も少なく、堅実な研究スタイルだと思います。ただその一方で、先行研究が既に土台を作ってくれているところに基本的には乗った上で風穴を開けられないか探る形になるので、(i) 本当に自分の興味関心のあるテーマで、自分が風穴をあけられる論文が見つかるのかはわからない (ii) 元となった研究と比べると、どうしてもインパクトが落ちがちになる、といった欠点があると思います。

スタイル1について重要な補足として、ターゲットとして選ぶ論文は自分でも（少なくとも頑張ればなんとか）理解できるような論文でないといけないことです。いくら重要な論文でもとんでもなく難しいことをして理解不能であれば、その論文をベースに論文を書くのは不可能だと思います。特に学部生や修士課程生などで専門知識が不足気味の場合、このターゲット論文の選定の際は気を遣い、必要に応じて指導教官等に相談するなどするべきだと思います。

スタイル2：自分がなんとなく興味関心を持っているトピックに関して、ちょっと先行研究とは違う角度から攻められないか、経済学の他のサブジャンルの知識や他分野のちょっとした知識など、自分の知っていることを駆使して考えてみる。

これは Yamagishi (2020, under revision for *Regional Science and Urban Economics*)²を例にとってみたいと思います。この論文は、最低賃金は貧困対策として本当に良い政策なのかどうか、ニュース等を通じて考えていたことが背景にあります。ただ、これに関しては労働経済学の分野で熱い議論が昔から今に至るまでずっと続いており、知識もなかった自分がこれについてそれに介入して論文が書ける気が最初はしませんでした。

そんな折、東大での地方財政学の授業で Brueckner (1982, *Journal of Public Economics*)の論文を読んだことがありました。この論文は粗く要約すると「地方政府が消防や公園維持などの公共支出をうまく感じに設定しているのか否かは、その地域の住宅需要に反映されるので家賃だけ見ればわかる！」というものでした。ここで、「消防や公園維持などの公共支出」の部分を「最低賃金の額」に置き換えても同じ議論ができ、家賃を見るだけで最低賃金の望ましさの判定ができるのではないかと気が付きました。非常に古典的で単純な発想な気がしたので同様の先行研究がないかかなり探したのですが、見つ

² <https://drive.google.com/file/d/1iUWKV1YYGj6R4FOqaAR294-eDmIu4lx0/view>

からないので新しい切り口であることが判明し、論文を書き上げることができました。

この論文は、恐らく地方財政学という、労働経済学とは別の経済学のサブジャンルから着想を得ることができたのが全てだと思います。地方財政の分野から着想を得て労働経済学の課題に応用したので、Brueckner のアイデアは 40 年前の古典的なものであったにも関わらず新しい貢献をすることができたのだと思います。全般的に、先行研究をしっかりと読み込んでそこに直球の貢献をするのもアリではあるのですが、そういうことをする人は沢山いるのでなかなか独自の良い研究をするのは（僕には）難しく思えました。それよりも、ちょっと違った角度から攻めることを常に意識するのは良いように思っています。

スタイル 3：同級生、先輩、後輩、教授陣…いろいろな人と研究の話をして何か生まれることを期待する。

これについては完全にケースバイケースだと思いますが、ここでは Kishishita and Yamagishi (Forthcoming, Journal of Public Economics)³の例を簡単に書いてみたいと思います。当時共著者の岸下さんは東大大学院の先輩で、ポピュリズムの経済学的な研究についてとても詳しい方でした。ある時岸下さんの別のポピュリズム論文に関してコメントしてほしいと依頼され、その際、別ジャンルである地方財政学の観点から書かれた Besley and Case (1995, American Economic Review) という論文を紹介して色々コメントをしました。すると後日、岸下さんから「Besley and Case の議論とポピュリズムに関する研究をもっと直接組み合わせると面白い論文になるかもしれない」という話が出て、そこから議論を膨らませることで論文が完成しました。

このスタイルについては補足があります。それは、研究分野は近いけどまったく被っているわけでもない人（例えば、経済学の他のサブジャンルをやっている人）にも興味を持って話す方が良いということです。そもそも自分と近い研究をしている人とはしか話さないスタイルだと話す相手が少なすぎて会話の絶対量が不足します。加えて、ちょっとずれた分野の人の方が新鮮な切り口を提供してくれることも多いです。

最後に全体を通じてのいくつか雑多な蛇足をさせてください。まず、1つのアイデアに固執しないのが大事だということです。体感的には、1つそこそ良いアイデアが生まれるまでに 10~30 の駄目アイデアが生まれています。さらに厄介なことに、一見良さそうなものによくよく考えると駄目アイデアという擬態型もあるので、1つのなんとなく良さそうなアイデアにいきなり固執してしまうと擬態型に騙されて駄目アイデアに執着する結果になる恐れがあり、後で非常に苦労することになると思います。次に、留学とスタイル 3 についてです。改めて書き出してみても痛感したのですが、留学に来てから今までは授業の忙しさと言語面でどうしてもこういう会話が減っていたように思います。（特に僕のような内向的な人間が留学している場合は）意識的にスタイル 3 を継続していかないといけなさそうだと思います。幸いにも、最近はややこの辺りの問題が解決してきて研究の話が（主に同級生と）いろいろできる

³ <https://www.iser.osaka-u.ac.jp/library/dp/2020/DP1077.pdf>

ようになり嬉しく思っているところです。願わくば、ここから何か1つ良い研究が芽生えてくれればと思っています。最後に重要な蛇足ですが、恐らくアイデアの出し方については個人差が大きいと思います。ぜひここに上げた3つのスタイルはあくまで僕の場合に効いたものであると考えていただき、自分に合ったスタイルを採用していただければと思います。

研究についての近況報告

さて、論文についていくつか朗報があるのでお知らせいたします。

- まず、以前のレポートで触れた "Contagion of Populist Extremism" は Journal of Public Economics に無事に掲載決定しました。(注3から草稿がダウンロードできます)
- "Minimum Wages and Housing Rents: Theory and Evidence" が Regional Science and Urban Economics という雑誌から改訂要求を受けました。既に1度目の改訂要求はクリアして現在は追加の改訂要求に対応中です。(注2から草稿がダウンロードできます) "
- 最後に、「趣味の研究」として以前のレポートでたびたび紹介していた論文が "School Bullying is Positively Associated with Support for Redistribution in Adulthood" と改題して Economics of Education Review に掲載されました。⁴ 趣味の研究だったのにさっそく認めてもらえて世に問えたのが嬉しいです。時間の都合上しばらく趣味の研究は休業かもしれませんが、またどこかで再開したいと思います。

いつも末筆になり恐縮ですが、船井財団の皆様のご支援のお陰で充実した留學生活を送らせていただいていることに感謝申し上げます。今後とも精進いたします。

⁴ <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0272775720305318>